

### 30P1-am037

日本固有民間薬キササゲ *Catalpae Fructus* に関する考証研究

○木下 武司<sup>1</sup> (1帝京大薬)

生薬キササゲは、ノウゼンカズラ科キササゲ *Catalpa ovata* G. Don 又は *C. bungei* C. A. Meyer の果実を基原とし、利尿薬として一部の家伝薬に配合される。『神農本草経』下品に梓白皮と称する一品があつてキササゲに比定されるが、樹皮を薬用部位とし、薬物としては全くの別種である。『中薬大辞典』はキササゲの果実を梓実と称するが、その出典は葉橘泉著の『現代實用中薬』であつて、日本における使用実績に基づく。したがって、キササゲの実を用いる薬方はわが国独自であり、問題はそれがいつ頃から始まったのかということにつきる。キササゲは中国原産であり、室町時代までの文献でキササゲに相当するものは見当たらない。『大和本草』(一七〇九年)に「一名カハラヒサキ葉モ木モ桐ニ似タリ(中略)實長クシテ豇豆ノ如シ又箸ニ似タリ」とあるのが日本の文献におけるキササゲの確実な初見である(カワラヒサゲの名ではあるが)が、果実の薬用には言及していない。『救民妙薬集』(一六九三年)、『經驗千方』(一八三二年)にキササゲ(又はカワラヒサゲ)の実を薬用とする処方が記載されているが、それぞれ諸腫物・イボ痔であつて、利尿に結びつく用法ではない。『用薬須知續編』(一七七二年)に「(キササゲは)サ、ゲノ代ニ料理ニ用ユルナリ」と記述され、薬用ではないが、日本でキササゲ実が食用とされたことが明らかとなった。飯沼慾齋の『草木圖説』(一八五六年)のキササゲの条に「林氏云、莢ノ煎汁ハ喘息ニ利アリ」とあり、欧州で北米産キササゲ属種の実が薬用とされていた<sup>1</sup>のを記載したものである。以上から、キササゲの薬用は日本での食用実績と欧州での薬用実績が結びついて発生したと考えられ、利尿作用は食用実績から経験的に知り得たものと推定される。

<sup>1</sup>Dvorskà, M. etc, *Fitoterapia*, **78**, 437-439, 2007.